

平成 30 年度第 1 回 県と市町村との総合教育懇談会（概要）

日時 平成 30 年 5 月 29 日（火）

13 時から 15 時

場所 県庁議会棟 404・405 号会議室

【知事あいさつ】

- 新しい総合計画を策定し、「学びと自治で切り拓く新時代」として、様々な政策を進める上で、「学び」を重要な概念と位置付けて取り組んでいくところ。子どもたちの学び、大人の学び、人材育成確保と、広い意味で学びを捉え重視して県として進めていきたい。
- その中でもとりわけ皆様方と検討を行っていく子どもたちの学びは、長野県の産業や地域の発展にとって、大変重要なもの。長野県の総合計画の方向性についてご理解を頂いた上で、皆様方にはご支援を賜るようお願いしたい。
- 本日のテーマは「幼児教育・保育の充実」そして「いじめを見逃さない長野県を目指して」である。いつの段階でも学びの重要性ということが注目されていることから、この分野について私ども長野県としてもしっかりと取り組んでいきたい。
- また、いじめの問題については、昨年度、基本的な方針の改定を行ったところ。まだまだ、いじめがなくなるという状況ではあるが、いじめをどう認識してどう受け止め、どのように改善していくべきなのか、今日は基本的な問題意識の共有から始めていきたい。
- 教育現場に近い市町村の皆様、教育長の皆様方から積極的なご意見をいただき、忌憚のない意見交換を通して子ども達にとって良い方向性を少しでも皆様と共有していければ大変ありがたい。

<議題 1：幼児教育・保育の充実について>

【小川村教育長】

- 質を担保することに対して、研修体制が不十分という課題が挙げられた。例えば、前に勤務していた信濃教育会では、「発達障がいの子どもの理解と支援」という講座を設けており、そこに幼稚園・保育園の先生が、たくさん応募してくる現状があり、研修を求めている。
- 教師はまず学びのプロでないといけないと思う。子どもの前に立つ者は常にそういう姿勢を持っていなければいけない。幼稚園教諭や保育士も同じである。幼児教育・保育の重要性を考える際は、「こういう保育士・幼稚園教諭を求めているのだ」という姿をはっきりさせた上での研修体制を考えることが重要。幼保小中の連携もとても大事である。

【長野市長】

- 保育園・幼稚園・認定こども園と 3 つあり、それぞれ管轄が違うが、一貫して将来の子どもを育てる上では、何らかの統一が必要だと考えていた。
- 長野市は、幼稚園・保育園・認定こども園の連携をとりながら、小学校へとつなげてきた。どこの園を出ようとも、小学校へ上がる際には、最低限、この程度は教育レベルを揃えようということで取り組んできた。資料 2 ページでこの方向性が位置づけられたことはとても良い。
- 小学校に上がる前は、とても重要な時期である。各市町村を含めて、県が主導で指針を出し

ていただき、長野県ではこういう子どもを育てていきたいということを明示してもらった方が良い。

- 幼稚園から小学校、そして中学、高校へも連携する形を意識しながら、保育園とも連携をとれるような接続を考えていきたい。

【川上村長】

- 村長就任直後に保育所の改築を行った。当時、保育所は、親が働くために子どもを就園させる施設であるから、教育の場所ではない。教育に足を踏み込まないように、ということを盛んに言われた。今とはまったく異なる状況だった。
- 社会情勢が変わる中で、教育という視点をしっかり持って、幼稚園・保育園が、わけ隔てなく、すべての子どもたちに質の高い教育を施す場所であるという意識改革が必要。昔の影響力が、各保育所にまだ残っているのではないかという懸念がある。

【知事】

- 昔から、幼稚園と保育所は違う役割だ、ということを聞かされてきた。この感覚に変化はあるのか。
- 保育士の皆様の養成カリキュラムの中で、保育だけでなく教育の観点は実際入っているのか教えてほしい。

【県】

- 今の保育士は、保育士と幼稚園免許の両方を持っている方が多いため、以前の育成機関で学ばれた方たちとは異なる資質を持っていると思う。しかし、ご指摘いただいた認識でいらっしゃる方々も一定数いるかと思う。県全体で、研修を出来てなかったことは反省点である。5割以上が、公立の保育所で育つ子どもがいる中、こういった場で、幼児教育の必要性をお話いただくことは非常に重要である。

【長野市教育長】

- やはり、全ての方の意識が変わっているかということも中々そうはいかないこともある。今の保育士の研修を受けた方々は、保育と教育両方の観点を学んできているだろうが、実際に現場でどうしているのかという点は考えなければならない。長野市では、こども未来部で、学校と保育所、幼保小をつなぐ研修会・懇談の場を通して、お互いが勉強し合う機会をできるだけ多く設けるようにしている。

【青木村教育長】

- インクルーシブな教育システムの研究の中で、保育園にいる3・4歳のうちに、発達障がいのお子さんの特徴がわかって丁寧に支援をする、そして小学校に向け丁寧に移行支援をすることで、障がいを克服したという例が何例も出てきていることがわかった。早期支援がとても重要であることと、お互いの教育機関を関連づけることが重要だと考える。
- 保育園の学びについては、中々教育委員会から言いづらいこともあったが、昨年3月、保育指針が変わり、アクティブラーニングの考え方が、保育園でも生きるのだと言っていたことは教育委員会としても歩みを共にできるのではないかと感じる。さらにこれを、県が主導していただけることはとてもありがたく、資料4ページ、信州幼児教育支援センターに

係る取組については、ぜひよろしくお願ひしたい。

【塩尻市長】

- 障がいの早期発見・早期支援に関して。塩尻市では、臨床心理士を含めた5人のチームで子どもたち全員を見ることにしている。先ほどのお話のとおり、障がいを早期発見することによって改善された子は明確に中学レベルで検出されている。
- しかし現実的には、早期発見について、保護者が認めるステージがないと不可能。保護者の理解がないと現実にはできない。
- 0～2歳まで親がみるのが良いのかそうでないのかといった視点も含め、幼児教育は極めて大事だと考える。

【佐久市長】

- 平成20年から、療育支援センターという形で、親子で通っていただき、発達障がいに関して、親子で受け入れるステージづくりに取り組んできた。親御さんがお子さんの障がいを受け入れることが課題であった時代から、社会的に発達障がいというものが認知され、受け入れやすい時代になってきている中で、幼児教育・保育の充実について、県がまとめて行こうとする指針には大きく期待する。
- 一方で、現場を見ると、グレーゾーンの皆様の戸惑いもある。学びというところに保育が入っていく際に、現状と理想のギャップをどう近づけていくのか、未満児を預ける方が増えている中で、愛着形成も課題となる。現場として理想を咀嚼できるか、現場スキルを上げられるかどうか、期待と不安が入り混じる状況。

【諏訪市教育長】

- 問題意識の温度差が大きい。行政、家庭、保育士、幼稚園の先生、それぞれに温度差がある。課題として質・人材とあるが、背景にはもっと色んなことがあるだろう。中でも、秘密基地を作るといった遊び観、子ども観というところが議論されるとありがたい。
- 子どもは学び直しをする。諏訪市は小学校5年生を対象に、70日間親と一切離れて宿泊生活をする取組を行っている。彼らは毎日のほとんどが、やまほいくのような状態の中で過ごし、そこで育っていく力から、問題意識を考える上で、非常に重要なポイントがあると思う。それは、小学校5年生の姿から、小さい頃身につけておかなければいけない力が見えてくることである。もっと小さい頃からこの力を身に付けていかなければいけない、といった意識を持って初めて、保育士であれば、やまほいくの必要性を感じ、保護者であればそれに対する理解が進んでいくのではないか。子どもは学び直していき、そこに目を落とすと、大事な力が見えてくる。そういう意味で色々な事例をもとにして、問題意識を掘り下げていくことがまず大切だと思っている。

【箕輪町教育長】

- 保育園は町長部局だが、箕輪町では、やまほいくにも8園中、3園取り組んでおり、様子も聞かせていただいているところ。
- 熱があっても学校へ行くよ、という子どもの気持ちを考えたとき、学校が楽しくて仕方がないのだと思う。遊びが大切で、遊びが自己肯定感を育てると資料にあるが、認められる、あるいは学校に自分の居場所がある、面白いという気持ちは保育園でも同じだと考える。

- “自然の中で体を動かして楽しい思いをする”といったベースがなければ、新しいものを学びとる、あるいは困難に打ち勝とう、という気持ちは萎えてきてしまう。学校さえも車で送迎してもらおう子もいる中で、昔は遅しさがいっぱいあったのと思うこともある。体が疲れたら気持ちは元気にならない。こういうベーシックなことも大事にする必要性。今後研究される中で、本視点を取り入れていただけたらと思う。

【長和町長】

- 少子化が進んでおり、子どもの数も減っている現状。長和町にも2つ保育園があるが、うち1つは山の中にあり、毎日やまほいくを実践しているような状況。
- 保護者の皆さんに、早期職場復帰の傾向が強く、0・1・2歳の未満児の入園が大変多い。従って、保育士の確保が非常に大変である現実。長和町には待機児童はいないので、未満児も相当数受け入れているが、同時に、部屋の数が不足し、施設の増改築が必要になってくるといった問題もある。
- 発達障がい児の話も出たが、1人の園児を保育士1人が見るという状況もあるので、保育士の絶対数が不足している。大きな市と、小さな町・村とで、視点が異なると思うので、そういったところも考慮しながら県全体として見てもらえればと思う。

【原山教育長】

- 幼児教育の問題をどこが取り扱うのかという点を考えた際、保育所が圧倒的に多いならば所管は県民文化部でいいのでは、という思いもある。しかし、この子たちがみんな市町村立の小中学校に入ってくるのだということを考えた際に、教育委員会としては、幼児教育の学びが小学校で生きてくるよう、一貫した学びができていないといけないのでは、という思いのもと取組を進めている。
- 知事部局との連携、また、市町村においては教育委員会、首長部局の皆さんとも連携しながらやっていかないといけない。いただいたご意見を踏まえながら、検討を進めたい。

【知事】

- ある幼稚園にお子さんを通わせていた親御さんのお話。幼稚園にいた頃は、自然の中で自由に、セルフコントロールできる形で遊ばせていたのに、小学校に入ったら、色々なルールにがんじがらめになってしまい大きなギャップがあるとのこと。このギャップを我々が調整していかなければならない。一貫した長野県の教育はどういう教育か。幼児教育の議論は、小学校の入り口、中・高の入り口につながる。
- 幼稚園・保育園の先生の話を見ると、発達障がいのお子さんへの対応に苦慮している様子。現場で考えている問題意識と、理想に対しては、つなぎを作っていないといけない。幼児教育の在り方を考える上では、段階・道筋を考えていかねば進まない。
- 幼稚園と保育園は別の体系で動いてきた。それを学びという観点でどう共通化していくか。実際の現場の保育士・幼稚園教諭の声を聴きながら取り組んでいく必要がある。

【轟教育次長】

- これまでのご意見の中で、基調として、幼児期の教育は重要であるという考えは共通してご指摘いただき、教育委員会を含め、県・市町村が一緒になって取組を進めていく必要がある

というご発言もいただいた。発達障がいに関する対応も重要になってきている。また、理想と現実とのギャップをどう埋めていくのか、遊び観、子ども観を踏まえて、検討をしていくべきだとのこと意見もいただいた。

- 意見交換を通じて、これからの幼児教育・保育の充実に向けて、県と市町村が一体となって取り組んでまいりたいという意味疎通はこれでよいか。(同意)
- 本日の議論等、また今後の取組方針等、ご参席されていない市町村の皆様にも、改めて県教育委員会から情報共有させていただきたい。

【長野市長】

- 以前、小中学校のお子さんと話した際に、運動するより勉強したいということを行っている子がいた。若年期の体力の低下は問題。保育所・幼稚園の段階で運動することを習慣づけさせてはいかが。遊びを通して、体力をつける、計算を学んでいくことは、とても大事だと思う。

【轟教育次長】

- 子どもたちの体力づくりの観点からも幼児期の取組はとても大事。その点含めて今後検討していきたい。以上で議題1は終了とする。

<議題2：いじめを見逃さない長野県を目指して>

【矢島教育委員】

- 皆さんが願っていることは共通だと思う。それは、全ての子どもが安心して健やかに、夢と希望を持って生きていく環境を保障できるような長野県にすること。私は今、CAPという活動を通して、子どもたち、先生、保護者を対象に、“子どもが、いじめや誘拐、性暴力、虐待、体罰など全ての暴力から自分の身を守るために、子ども自身ができること”をテーマにワークショップを行っている。
- 本日は、子どもの声を現場の声としてお伝えしたい。いじめは暴力の1つであり、エスカレートしていくもの。早い段階でいじめと認識するか、ふざけているだけと認識するかは、その後、大きな違いとなって反映される。
- いじめ、いじめではないという違いは力関係が働いているかどうか。力関係は、いつも一方的なものである。やめて、といった際にすぐやめてもらえる状況であれば力関係は働いていない。
- 例えば大津の事例。被害者は、笑わざるを得ないほど、みじめ・つらい・死にたいという気持ちであったということを知っていただきたい。
- 認識の違いは、被害者の視点に立つか、加害者の視点に立つかという点から生まれる。まず私たち大人が、被害者の視点に立つことはとても重要である。いくつか事例を上げながら説明したい。
- ある子どもは、いじめによって不登校になった。そして、ネット依存に陥り、寂しさからSNSでつながった人に、性暴力を受けた。この問題の根本は、「いじめ」である。
- いじめの認知件数の増加は、被害者視点で物事を捉えるようになったということ喜事しいこと。約9割の子どもたちが、いじめの被害も加害も経験しているという統計が資料にある中で、いじめの認知件数が0~1件の学校は、よっぽどの小規模の学校か、それとも本当はないのか。もしくは子どもを見ていない、寄り添えずに見逃しているのではないのか。

- 子どもの現状を、子どもの視点から見る事が非常に重要である。一晩でいじめの被害や加害が入り替わる事だってある。
- いじめをエスカレートさせないために、認知した段階でストップできるかできないかという点が重要になってくる。小学校でしっかりした対応ができなければ、中学校でさらに大きな問題行動として表れる。早期にしっかりとした対応が望まれる。
- 加害者がいなければいじめは発生しない。被害者は決して悪くない。もっと強くなれ、嫌なら嫌といえればいいじゃないか、といった指導は、加害者の視点である。ある小学校の子どもの事例では、いじめについて、先生に相談したら、自分ひとりで嫌だと言ってごらんと言われた。それができないから先生に相談に行ったのに。その子は教室に入れなくなった。既にいじめによって力を奪われている、家庭で愛情をたっぷりもらえていないために「嫌だ」と言えるほどの自己肯定感がない子どももいる。
- では、いじめの加害者を排除すればよいのかというと、そうではない。加害者は、いじめをせざるを得ないほどの何か背景を抱えているという認識が重要。いじめをしてしまう加害者、これは、SOSのサインである。あるとてもひどいいじめをしていた中学生の子どもの事例を挙げる。小学生のときにひどいいじめを受け、それを周りの大人に相談したら、すぐにいじめはなくなったのだが、いじめられたときの、みじめな辛かった気持ちを誰も聴いてくれなかった。だからその気持ちを抱えたまま中学へ進学し、何かのきっかけで爆発して人をいじめてしまっている。いじめの加害者である前に、いじめの被害者であった。
- また、いじめと万引きを繰り返す子どもの話を聞いたが、シングル家庭であり、貧困家庭であった。親は遅くまで働き、スーパーで買って来た惣菜を夜、みんなで食べる。寝る時間が遅くなり、早く起きられなくなる。やっと起きて学校へ行ったときに、先生から、給食だけ食べにきたのか、と言われた。それまで一生懸命学校へ行っていたのに、みじめな悔しい気持ちになって学校へ行けなくなった。散々悪いことをしてきた。いじめも万引きもしたが、生きていくにはそれしかなかった。ぎりぎりのところで生きている子どもたちは、大人の何気ない一言で本当につらい気持ちになる。
- 大人の対応の悪さ、大人から傷つけられた結果、いじめの加害者になっている。いじめの問題は、子どもの問題のように感じるけれど、大人の問題もかなり大きい。子どもの気持ちに寄り添って、共感して一緒に考えていく大人の存在が必要不可欠。先ほどの、いじめを繰り返す子どもは、一人の先生との出逢いによって本当に変わった。助けてもらった。早期にこれができるれば、子ども自身の心が強くなり、自分には頼れる人がいるんだ、と思えば、同じことをされても言われても、跳ね返す力につながっていく。認知件数もそれにより減ってくるのではないか。そして、いじめの連鎖も止められる。
- SOSを出す教育、と言われるが、子どもたちは散々SOSを出している。それをキャッチできない大人が多いために、見逃されてしまう。小学校5年生のときに自殺を試みた子どもから、「誰も気がついてくれなかった」と言われたことがある。大人の人権感覚を磨いて、子どもの心と体を傷つけるいじめは、人権侵害であることを共通認識して、全ての子どもたちが健やかに育てる長野県になってほしいと思う。

【青木村教育長】

- 青木村では、カウンセラーを雇用して、保育園・小学校・中学校に、週1日ずつ駐在していただき、お子さんや先生方、保護者の方の話を聞くようにしている。

○考え方としては、トラブル・いじめはどこにでもあるという認識で行こうと話している。ピンチはチャンスにしようという考え方。ピンチだと思ったら表に出したくない、しかしこれは集団づくり・学級づくりのチャンスになるという考え方に転換をする。私が教師をしていた際も、クラスのトラブルはたくさんあった。しかし、みんなできちんと話し合いの時間をもち、こういうクラスに変えて行こう、と結論づけた子供たちの顔は明るくなっていた。

【長野市教育長】

- 長野市も積極的にいじめを認知していこうということで100件以上増えている。認知件数が0という学校はなし、という方向で動いている。ただし、闇雲に言ってもいけないので、やや統計的なことを話すと、小学校の3年生・5年生の時期に認知件数が増えている。成長の発達段階にも関係があるのか、この学年をもつ先生には、より一層子どもたちに着目し、様子を見るよう、今年度からお願いしているところ。
- 見逃さないということを前提にすると、どれだけ多く、いじめの認知件数を増やしたかという点もポイント。ただ、学校の対応だけでは、中々解消に向かわない現状もある。それについては、教育委員会としても全力でバックアップしていきたいと思っている。

【箕輪町教育長】

- 教員時代、生徒指導の厳しいと言われる学校ばかりにいた。大事なことは、「隠さない」ということ。そうすると、地域の皆さんに色々な指摘を受ける。前はもっと良い状況だったのに、と言われることもあるが、それは表面化していなかっただけの話である場合もある。
- 隠さずに伝えると、地域の皆さんは、「それほど苦労されているならば、みんなで応援しましょう」となる。少しでも改善されれば、それを励みにまた頑張れる。いじめのことについても、0という学校もある中で、本当の数を上げていく、その上でそれはいじめなのかそうでないのかということを見極め、重大事案にならないようにしていくことが大事。生徒指導と同じであると思った。
- 「長野の子ども白書」に関する新聞記事から。学校の授業に満足している子どもたちは、自尊心も高く、自己肯定感も強いといった分析を見た。いじめを見逃さないということと合わせながら、学校は楽しいという気持ちを子どもたちに育てていくことも重要であると考えられる。

【知事】

- いじめの話は感覚意識の共有から。この調査にあるように、いじめとは、一体何か。認知をしているか、していないかは、極めて重要。
- 私が子供の頃は、年中喧嘩していた。自分たちの経験に照らすと、それくらい頑張りなさい、と対応してしまう大人が多いと感じる。感覚が違っているのだろう。
- 一般的ないじめについて、本当に、腹の底に落ちたような定義づけがされていないので、学校毎の認識数の違いが生まれる。
- また、行政として対応するときに、どこを防衛ラインとするのか。完全予防なのか、早期の対応なのか、それとも、家屋が燃焼することだけは避けよう、といった程度にするのか、ここも、根幹的な認識の共有ができていない。いじめをなくす、と言った際の受け止め方が人それぞれ違っている。ここを共有する必要があるのではないかと。

【矢島教育委員】

- まっすぐな成功人生を歩んできた中で、いじめたり、いじめられたりという些細なイベントがあったという大人の中には、共感できない人もいると思う。昔と今と、地域力、家庭力も違う中で、学校・家庭・地域を全てひっくるめて、解消していく必要がある。
- 一人で抱え込まない、嫌なことは嫌と子どもたちが言える、跳ね返すことができる状況にすることが大事。

【知事】

- どの辺りで防いだら良いのか。

【矢島教育委員】

- 先生が認知した段階で、これ以上大きくならなければ良い。先生方がしっかり寄り添って、子どもたちに大丈夫と思わせること。また同じことが繰り返されたときにどうすればよいかを一緒に考える。一度受け入れてもらった子どもたちは、大人の存在が後ろ盾となってくれるという気持ちから大丈夫になる。

【青木村教育長】

- 先ほど、発達障がいのお子さんの早期支援をすることで、障がいを克服したという事例をお話した。発達障がいの8割にはコミュニケーションのトラブルがあると思っている。克服した、とはどういうことかと言うと、その日嫌なことがあったら必ず先生に相談するという仕組みを構成していたことが関わってくる。2時間目の休み時間は支援員がついてトラブルに対応した。1年半にわたって、その日のトラブルは、その日のうちに解決するようにしたこととでその子は、コミュニケーション能力を自分で獲得していくことができた。そのため、3年生からは何の支援もいらなくなった。相談する相手がいたということが最高の支援だったと考える。

【佐久市長】

- 隠ぺいという心理を考えたときに、解決しづらい、という状況がある。これにより、いじめを過小評価してしまう現象が起きるのでは。いじめを認知しやすい状況を作るとともに、解決する術、道筋を構築していかないといけない。
- ポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチは、どの問題にもある。ポピュレーションアプローチは、いじめる側、いじめられる側について、「いじめは良くない」「いじめが起きたらこう対処しましょう」といったことを教えている。そしていざ、実際にいじめが起きた場合の、ハイリスクな状態になったときのアプローチというのは、いじめられた被害者に寄り添う方法だった。相談窓口を設けるなど、市町村の皆さんも取り組んでいることかと思う。ただ、いじめは、被害者だけでなく、「いじめた人の心理」にも寄り添うことが必要だと考える。ハイリスクアプローチにはそれがなかった。現場の先生方のスキルによって、加害者への寄り添い方は違っていた。だから上手くいくときもあればいかないときもあった。ここを一般化していくことが重要。
- いじめをした人へは、反省を促すことが第一になっている。しかしお話を伺っていて、いじめを深く解決していくためには、反省を促すことに留まらないで、いじめた人の心理・背景を紐解いていかないといけないと認識。これは相当難しいことではあるが、いじめをしてし

まった子に対するハイリスクアプローチが整っていないことが、問題解決を難しくしていることを整理できた。

【矢島教育委員】

- 視点を変えれば良いと思う。子どもたちは、いじめはいけないとわかっている。それでもいじめをしてしまう。加害者に対して、いじめはいけないと反省文を書かせたりすることは、指導であり、根本的な解決につながらない。指導から、いじめをせざるを得ないほど大変なことがあるのね、一緒に考えよう、といった、支援にシフトすると効果が表れる。

【小川村教育長】

- 近隣の教育長さんといじめについて話しあう中で、小学生の高学年とか中学生になってくると、ラインやTwitterなど、SNSを介したいじめが多いことが話題になった。学校の教職員が気づかないうちに、疎外されている。被害者の子も最初は気づかない。養護教諭に相談して初めて、発覚する事例もある。昨日まで仲良かった子ども同士が今日突然変わっている。子どもたちは、コロコロ変わっていく人間関係に怯えながら生活している事例もある。
- 担任のところには行きづらいという子どももいる。かつて「聞いてねルーム」という相談室を校内に3か所設置したことがある。誰のところでもいいから、相談にいけるように、周りの大人が機会や場所を作ってあげることがとても大事ではないか。見えないいじめ、学校外で起きているいじめに、学校がどう気づいていけるのか、手をつけていくひとつの機会となるのではないか、と思う。

【長野市長】

- 子どもは、本当に大人の言うことを見て、聞いている。子どもは非常に感受性があり、理解力がある。小学校・中学校へ上がる前に、保育園・幼稚園の段階で、いじめの兆候があれば、先生が、これはいけないことだ、と言えるようにすることが大事。
- 今の大人は、人の子どもを怒れない状況。地域で子どもを育てる大切さを再認識し、小さい時から、いけないことはいけない・良いことは良い、と気づかせていく必要性がある。

【川上村長】

- 問題の深刻さを感じているところ。我々の育ったときのことをベースに考えることは全くの誤り。我々の時代は、自己完結的なことで収まっていた。今は、いじめがどんどん大きな問題になってしまう時代。
- 子どもたちの日常は、勉強の中にも打算を相当含んだ生活であることをしっかり認識しなければいけない。人間の尊厳を子どもたちの中にしっかり育てていかないといけない。
- いじめの細かな認知をすることも大事だが、その先がさらに重要。深刻な状況にならないよう、どういう取組をすべきか考えていかなければならない。

【諏訪市教育長】

- 認知件数については、増加・減少を繰り返している。対策が功を奏して数が減ったかと思えば、現在急激に増加している。風化させてはいけない、ということで力を入れたり、問題に挙げられたりした際に、件数が増えていると感じる。
- 大人のセンサーが錆びてしまっていてはいけない。もっとオープンに話し合うことが大事で

ある。そして、子どもを知ることが、大人のセンサーを錆びつかせない秘訣だと思う。法律等を整備しても、それだけでは解決しないことをしっかり認識しないといけない。

- また、「いじめはどこにでもある」というフレーズは二面性を持っている。「いじめがあることは、当たり前のことである」という安心感を与えるが、逆に「どこにでもあるのだから、大事にしなくても構わない」という危険な思考にもつながる恐れがある。

【矢島教育委員】

- いじめの問題は、大人の問題と発言したが、例えば家庭での噂話（「あの子は福島県から越してきた」「コミュニケーションが苦手である」といったもの）を何気なくしている、その会話をいじめの契機とする子どもがいる。私たち、大人が学んでいかなければならない。良いモデルとなる大人が必要になると思う。

【原山教育長】

- いじめの認知件数ということで、データが出る。我々は、データを元に対策を考えざるを得ないが、0件と100件というデータが混在するものを信頼できるのか、といった議論になる。認知ということに関しては、共通の認識を持つ必要がある。
- 事案がいじめ・攻撃であるかどうかは、被害者にとって、という見方でないといけない。子どもたちの誰もが被害を受け、誰もが加害者になるという時代。学校でどうしたらいいか、地域でどうしたらいいか、考えなければならない。いじめの認知件数が増えることが悪いという社会的な感覚を一掃すべきである。いじめを認知し、早期に捉えて重大化させないということ、まず目指すべきではないか。これを社会の常識にしたい。

【知事】

- これから解決のためにどうするのか、ということは重要。学校だけの責任にしてはいけないという観点。事象は学校で起きていても、原因は学校だけに留まらない。社会的な問題という認識で考えなければいけない。
- いじめる側へのサポートも検討していかなければならない。表面的、一時的に抑え込んでも解決にはならない。心の拠りどころとして存在できる大人を見つけられるように支援することが大事。実態を把握した上で、深く考えていきたい。

【轟教育次長】

- いじめを見逃さないという問題、近年の特徴である SNS を通じたいじめ、看過することなくいかに早期に対応するのかという問題等、様々なご意見をいただいた。
- いじめの問題は、長野県いじめ問題対策連絡協議会という場があるので、今日のご意見引き継がせていただき、踏み込んだ議論を進めたい。
- 次回以降、総合教育懇談会の場でも、機会を見ながらご議論いただく場を設けていければと考えている。